

開拓民の数奇な歩みと無住の地に建つ開墾記念碑

一、開拓の始まり

三ツ沢集落から東西二・三kmの国有林内（通称 屋敷沢）に、栃台と俗称されていた開拓地があった。

開墾の始まりは、大正九年（一九二二）と言われているが、当初の入植者は立谷沢村（旧立川町）の人々を中心で、十三家族が山奥

に入り、畑地を開墾したことからと始まったという。

大変な苦勞により開墾が進み、大豆などの豆類は良く取れたが、家計収入の中心は「炭焼き」であった。

山形新聞（昭和七年七月一七日）では、「古口三里の山奥に珍しい原始的部落 国政調査で発見した十六戸 漸く

文教場を作る」との見出で、

「大正一四、五年ごろ立谷沢村より密かに移住してきたので、古口村役場でもこんな山奥に人家があることすら知らず一昨年の国政調査で初めて発見されたのであって、全部落が一族制度となつて総ての生産品は部落民共有のものとされて

いる全くの原始的な珍しい部落である」と報じられた

ほど世間からはほとんど注目されることなく、言わば隔絶された状態での生活を営んできたものであったらしい。

入植年次については、資料により若干異なるが、当初は庄内側からの農繁期だ



（表）

相馬金蔵君

功七級勲七等

長南仁吉君

両氏当地開墾ノ有望ナルヲ認め

率先事ニ当リ拮据苦心ヲ盡瘁ソ

ノ結果燦然其ノ事ヲ開キ其ノ実

ヲ結ビ今日ニ至リテ皆其ノ福ヲ

享ケ鼓腹洋洋タリ吁両氏ノ功績

永ク銘スベキ也

昭和四年月建立

（裏）

発起人（三名）

氏名 略

世話人（四名）

同 右

連中名（十四名）

同 右

神職（一名）

同 右

けの、今でいう通勤耕作から始まったものといわれ、やがて新天地へ夢を託して集落こぞっての移民となった訳である。

昭和七年（一九三二）七月、栃台分教場が設置されたが、これは開拓者一同の結束、努力の結実ではあったほか、開墾の中心人物「相馬金蔵」、「長南仁吉」両氏に負うところが大きいとされている。

二、相馬金蔵と長南仁吉

両氏は、標高二四〇mの「栃台開拓地」の開祖とされている。

栃台集落は大正九年、東田川郡立谷沢村の門脇清蔵ら一七名によって作られたもので、彼らは国有林の払下げ、長南亥吉をリーダーに「製炭」を行う傍ら開墾を進め、粒々辛苦の結果、昭和四年（一九二九）には住宅のほか、分校・公会堂



栃 台 集 落

（現在の集落公民館？）も建つほどになったという。

相馬金蔵、長南仁吉も同郷（立谷沢村）の人である

が、相馬金蔵の子孫（相馬まつみ氏、古口歴史探訪編纂当時）に聞くと、両氏は栃台開拓の有望なることを

考え、他に率先して開拓事業に当たり、関係筋（営林署など）への交渉等に東奔西走し、未知から成功へと導いたという。

住民は両氏の功績を称え、感謝を込めて、長南亥吉、秋保源次郎、大江慈導（僧侶）氏らを発起人として、昭和二九年（一九五四）開拓団解散（当時の団員9名）に合わせ、彼らの顕彰碑を建立した。顕彰碑に関しては所在も分からず、また、山形新聞（昭和六二年十月一四日）では、入植者子孫の発意により、開墾記念碑の脇に慰霊柱を建立したとあるが、こちらも三〇有余年の時の流れとともに朽ち果てたものと思われる。

三、満州移民と引揚げ

満州（現 中華人民共和国東北地方）への進出は、日露戦争（一八五〇～五五）以降、活発になり、日本の

帝国主義的施策により昭和七年に満州国が作られ、満州国移民が国策として進められた。

最上郡内で満州開拓移民の計画が本格化したのは、昭和一四年（一九三九）七月からで、満州に第二の最上郡である「満州最上郡」を築こうとしたのである。

そんな中、栃台住民が集落を挙げて満州移民を決意するに至ったいきさつとしては・・・

（一） 5 ～ 6 年前と比べ、組合協同積立金の増加などにより経済好転の兆しは見出せるが、これが部落（集落）更生運動の成果かどうかで考えて見ると、その大半は農林水産物の価格上昇であり、このことがいつまで続くのかを考慮すると、更生運動の根本原因の解決は未だに、と感じる。



栃 台 開 墾

（二） 栃台部落の現在収入の7 ～ 8 割までが製炭だが、製炭資材伐採跡地には年々スギが造林され、（資材確保の）範囲は縮小しており、また、国有林野施業経営案により木炭の資材払下げ量についても限度の状態となっている。

（三） その他、二・三男の将来に対する問題、教育問題、医療設備の問題、結婚の問題などを考慮すると、（このままで）生きがいある輝かしい人生を送り得るであろうか、と「栃台文教場経営」（鈴木富雄氏著）には記されており、土地・人口問題を解決する方策が満州農業集団移民であったことが伺われる。

そして昭和一六年（一九四一）南満州の奉天省昌図建桜桃村に入植したが、その地は豊穡で広大であり、開拓地は順調に進展したが、突如、移民者にとつては晴天の霹靂ともいふべき事態が起こった。

すなわち、昭和二〇年八月の旧ソ連軍の対日参戦と太平洋戦争の敗戦であり、移民者たちは開拓地からの引き揚げを余儀なくされたのである。

四、再入植と再び無人の里へ

敗戦により、翌年帰国した旧栃台住民は、山形県庁の強力な勧めもあり、満州移民後、数年の放置ですっかり荒無地と化していた栃台に再び入り、開拓を行うことにしたが、既に山形から食糧増産隊一〇名が入植しており、彼らに合流する形になったという。



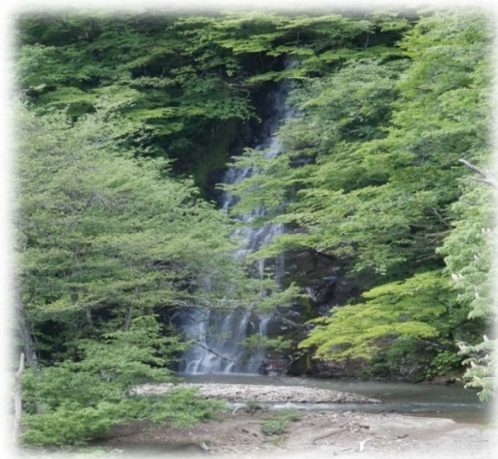
「家を建てるときは野原にゴザを敷いて寝た。沢の近くに寝た時は蚊がいて寝られたものではなかった。」

「学校どころの騒ぎでない。住む家さえなく、満州に行く前から建っていた神社の中に泊まった。それでも入りきれないので、神社の前に蚊帳を吊って寝た。家を建てた時に学校も建ててくれたが、屋根も力や、熨斗建ても力や、庭に力やを敷いたのが教室で暗くて暗くて勉強なんかできなかった。集落の大人が教師代わりとなって教えてくれた。その後で教師が来る前に学校は、やっと立派になった。」と

当時の分校生の作文（旧古口小学校編 七つの分校の子どもたち）や「栃台開拓部落について」（元分校教員西嶋一春氏著）に記されているように、何もない状態での再入植であったことが伺われる。

その後、やはりと言うべきか、電気もない非常に厳しい生活環境だけでなく、頼みの田畑も気温と水温の低さ、日照時間の不足、痩せ地、傾斜地等々の悪条件のため、入植者自身が「ここでは作物は良く育つはずがない。」というほどの耕作不適地であった。

このため、旧古口村役場でも「古口村農業振興計画（昭和二十六年一〇月）により、家畜（役牛、乳牛、緬（メン）羊）の導入による営農計画を立てたが、入植者は既に現金収入となる「炭焼き」に大きく依存しており、また、その後の社会情勢の激変（高度経済成長による都市部への人口移動等？）により離村が相次いだことから、昭和二十九年（一九五四）栃台分校が廃止され、翌三〇年、栃台は再び無人の里に帰ってしまったのである。



現在、開墾跡地には林道から自動車で約一時間の道のりであるが、開通以前は高屋から山道を歩いて二時間余りを要した。林道からの風景は、急峻な山々が連なり、人工林と天然林が入り混ざるも深山の中に引きこなれるようであり、途中、名も知れぬ名瀑も顔を出す。

二〇一九（令和一）年五月二十九日、森林管理署職員と跡地に足を踏み入れ、開拓の痕跡を探しましたが、

林道脇に記念碑と山神を祀った石碑があるのみで、スギと藪のため、当時の面影を見つけることはできませんでした。その代わり、林内に入った早々、ヤブ蚊の大群に纏わりつかれ、手などを刺されたことから大変辛い思いをし、入植当時の難儀の一端に触れるものとなりました。

（文献 戸沢村史、古口歴史探訪）

